

---

# ひとり、またひとり

黒白トマト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひとり、またひとり

### 【コード】

N7323G

### 【作者名】

黒白トマト

### 【あらすじ】

旅人と少女のとあるおはなし。それは、繰り返し繰り返し。

ひとり、またひとり

旅人は迷った。深い深い森の中に迷い込んだ。

どれくらいさまよっただろう。太陽が顔を出してまた引っ込めて、月が照らしてくれて。

腹が減って、食料もなくて、あてもなく川沿いをゆっくり歩いてきた。

すると、大きな、とても大きなウッドハウスを見つけた。

ハウスの前の草むらに小さな女の子が座っていた。少女は薄汚れた一枚布を身につけていた。昼寝でもしているのかと思つて、旅人は小さく声を掛けた。

「寝ているのかい？」

すると、少女はそれに応えるように顔を旅人に向けた。

「寝てはいないわ」

「そう、君はここでひとりで暮しているのかい？」

「そうよ」

旅人は不思議そうに少女を見た。

「家族はいないのかな？ ああ、ところで君の名前は」

少女は旅人をじつと見つめる。

「家族と言える者はいないわ、だいぶ前に死んじゃったから。で、私はアリス。すぐく前におじいさんがつけてくれたの」

少女は自らをアリスと名乗った。アリスの言うだいぶ前とか、すぐく前と言うのは旅人にはいまいち判らなかつた。アリスは、大きな頭蓋骨をお腹に抱えていた。それが不気味に思えた。よく見れば、周りには骨が散らばっていた。旅人がその事について、アリスに聞こうとした、しかし、アリスはそれより早く口を開いた。

「あなた、とてもお腹すいてるわね。うちで食べていって頂戴」  
アリスは手招きをする。旅人の腹の虫はここに来てからまだ一度も鳴っていないのに。

「どうして僕がお腹すいてるの判ったんだらう？ それより、ほんとうにいいのかい？ 御馳走になつて」

ちょうどお腹がすいていた旅人には良い話だ。だがなぜここまで良くしてくれるのか、わからなかった。骨の事は今は聞かないことにした。

「久し振りのお客さんだもの、いい気分で帰ってもらいたいから」  
「なら、お言葉に甘えちゃおうかな」

「僕はここに座っていればいいのかい？」

旅人は家の中へと招かれた。雑多に本やらなにやらが積み重なつて、足の踏み場が少ないが、この際文句なんて言える立場ではない。  
「ええ、座つて頂戴、暗くなつたらそのランプに火を灯して」

しばらくすると、いい香りが部屋中に立ちこもつた。

主にキノコをつかつた料理だ。スープや炒め物。久し振りにパンを食べることができた。

「うん。おいしいよアリス」

「そう、よかつた。ところであなたは旅人よね？ これまでにたくさん場所を歩いたのよね」

「そうだね、全国各地いろんな場所を旅してきた」

「よかつたら、お話聞かせてくれない？」

旅人はいいよと頷いた。ご飯のお礼としていくつかの国の話をした。それをアリスは楽しそうに、嬉しそうに、聞いていた。

「お風呂沸いたけど、どう？」

「いいの？ いやあ、いつぶりだらう、お風呂なんて。ありがたく

使わせてもらおうよ」

「お布団敷いてあるわ、寝ていくといいわ」

「そこまでしてくれて悪いね」

「別にいいわ、それよりさっきの続きを」

「うん、あの国ではね」

すっかり夜も更けて、旅人は一晩、アリスのウッドハウスで寝泊まりすることにした。

朝、柔らかな布団のおかげがよく眠れた。

起きると、アリスが朝食を作っていてくれた。

「早いわね」

「うん」

テーブルに運ばれた朝ごはんは昨晚のとはまた違った料理だった。旅人はありがたく頂戴した。

「ねえ」

「なんだい？」

「ここにずっと居座る気はない？」

「……。僕は旅人なんだ。一ヶ所に留まるつもりはないよ。ありがとう、アリス」

旅人はカバンからあるモノを取り出した。

ピンク色をした布だ。

「これは東の国の人々の着るものなんだ。キモノと言うそうだ。無理を言っただけで譲ってもらったんだ。いつか役に立つと思ってね。アリス君、に」

一宿一飯のお礼としてキモノを差し出す。受け取ってくれるだろうか。

「ほら、着せてあげる。そのボロっちい布を脱いで」

「だめよ！ これはおじいさんが私にくれたものなの」

初めて声を荒げるところを見た。よっぽど大切なのだろう。

「きつと似合うと思うけどね」

「……。じゃあ、あっちを見ていて頂戴」

スルリ……。衣ずれの音。旅人は言いつけを破り、アリスの体を見た。

「っ……。これが私なのよ。」

アリスの体は真白だった。それはもう雪のように。そして関節が球体だった。いつだったか、どこかの国でみた。球体関節人形。

「アリス、その体」

「そう、私は人形なのよ、気持ち悪いでしょう？」

「いいや、そんなことないよ。それこそ、言葉を話す人形なんていくらでも見てきた。それ程驚かないよ。それよりキモノを」

着付けを初めてしばらくして

「きついわ、苦しい」

「少し我慢して。はい完成っ」

カバンから手鏡を取り出してアリスに自分の体を見せてやる。きれいだっただ。

「似合うよ」

「そうかしら」

アリスの抱えていた頭蓋骨や周りに散らばった骨の数々、あれらは今までアリスと暮らしていた者のだと判った。人間には寿命がある。人形にはない、壊れたり、ゼンマイを巻かなかつたりすると止まってしまっが。

なるほどと思う。

それなら、旅人もアリスと共に暮らそうと決心した。コレクションに加わるっ。

「アリス、これからずっとよろしく」

「ええ、こちらこそよろしく」

それから数十年。

キノコ狩りに来ていた村の少女が森で迷った。しばらくさまよっている、大きなウッドハウスを発見した。

「あそこならだれかいるかしら」

少女は駆けだした。

(後書き)

思いつくままに書きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7323g/>

---

ひとり、またひとり

2010年10月8日15時52分発行